

～鮮魚ボックスを用いた魚の生存率や価格調査～
活魚流通構築推進協議会（東京都千代田区）

背景・課題

活魚輸送は魚種や輸送条件により難しい場合や、ノウハウが確立されていない場合がある。また、活魚の輸送のコストが高いという問題がある。

離島からの活魚流通は、貨物船での輸送となるため、輸送や備蓄時間の長時間化による斃死リスクの増加も生じている。そのため、活魚流通に関わる各機関がそれぞれ連携し、輸送コスト圧縮や輸送時間短縮を図るとともに、新たな活魚輸送方法のノウハウを構築する必要がある。

取組のポイント

規格外である等の理由で市場流通では安価に取引される、低・未利用魚を活魚として流通させ、珍しい魚を求めている販売店等への販売推進に取り組む。

活魚を日建リース工業東京活魚センターにて熟成加工を施した加工品製造で付加価値向上を図る。

商品開発等も行い、活魚流通構築促進協議会の活魚センターで販売していく。

取組の成果

新型魚活ボックスを2タイプ購入し、これらを使用して実際に活魚輸送試験を行った。試験では輸送後の魚の斃死もしくは衰弱割合の調査や、新型魚活ボックスで輸送された魚の魚価の推移について調査を実施した。

調査の結果、活魚流通構築促進協議会の知名度が売価に影響することや、現場作業員の育成が必要であること等の課題も発見することができた。

プロジェクトフロー

流通業者

- ・活魚輸送は魚種や輸送条件により難しい場合がある
- ・輸送コストの圧縮や輸送時間の短縮を図る必要がある

離島等の漁業者の所得向上に貢献。
魚活ボックスを備蓄水槽として扱うことで、水産物の高品質化を実現。
メディア出演等により認知度も向上

活魚流通構築推進協議会

未利用魚を活魚として流通
鮮魚ボックスを2種類購入し、実際に活魚輸送試験を実施、輸送後の魚の斃死もしくは衰弱具合、魚価の推移について調査

魚活ボックスの活用により、高品質な状態での活魚流通体制を構築。
新たな活魚輸送網の構築に着手。

魚活ボックス

